

オトナのための日本語塾

レポート集 2016

武庫川女子大学言語文化研究所 編

まえがき

この冊子は、本研究所で開講された「オトナのための日本語塾」に参加した人たちによるレポート集の、昨年続く第2弾です。

本研究所では、一般の方たちが日本語について楽しく話し合う会「ことばのサロン」を発展させて、「オトナのための日本語塾」と銘打った会を昨年度に立ち上げました。

ここでは、暮らしの中のことば遣い、テレビや新聞のことばから、近所の立ち話、さらにはネットの中のことばも含んで、私たちの生活にかかわることばすべてを、考察の対象にしました。その際「ことばの正誤を峻別するよりも、なぜそういうことば遣いをするのかを考えよう」を基本精神にしています。

活きたことばにいつも正解があるとは限りません。私たちは他人とよりよいコミュニケーションをとるために、いろいろ考えながら、あるいは、反射的にことばを遣っています。その結果、うまくいくこともあれば、思いもかけない誤解が生まれることもあります。うまくいった例も失敗した例も、ことばの働きを考えるための「教科書」になります。私たちは、自分たちで見つけた教科書を使って議論して、ことばの上手な遣い方のヒミツに迫るといって、よそにはないシステムで一年間勉強を続けたのです。

そして、その成果の一つがこの冊子です。今回は、それぞれ自分の関心のあることについて、レポートを楽しんで書きましょと提案しました。その結果、3人の方の文章を掲載することができました。ご本人たちをよく知る私には、それぞれいかにも個性あふれる文章になっていると感じられました。このことは、楽しみながら書いてくださったことと無関係ではないでしょう。

参加者すべての方のレポートを載せることができなかったことについては、残念な思いもあります。しかし、レポート提出に至らなくても、ご参加くださった、それぞれの方がことばについて自分なりの成果を得られたことと信じています。

最後に、この企画を陰に陽に支援してくれた本研究所の岸本千秋さんに感謝の意を表します。

塾長 佐竹 秀雄

目 次

まえがき

佐竹 秀雄

レポート

竹腰 純：日本語の誤用を防ぐスローガン・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

加茂 豊：『文章読本』に学ぶ（文体をたずねて）・・・・・・・・ 11

上野 和美：なぜ〈剥ぐ〉も〈接ぐ〉もハグなのか・・・・・・・・ 21

日本語の誤用を防ぐスローガン

竹 腰 純

1. はじめに

日本語が乱れていると言われて久しい。平成7年から毎年、文化庁が「国語に関する世論調査（以下「調査」）」を実施し、新聞・テレビ等マスコミがその結果を取り上げるようになった。平成28年3月16日にはテレビ大阪で「ニッポン人の9割が間違える!?～日本語検定～誤用だ！御用だ！」が放送された。日本語の乱れに関する書籍も出版され警鐘を鳴らしているが、日本語の使い手にどこまで浸透しているかという点と効果は限定的と考える。

2. スローガン

警鐘を鳴らす手段の一つに標語・スローガンがある。その中でも身近なものは交通安全標語・スローガンだ。交通安全年間スローガンは財団法人日本交通安全協会と毎日新聞社の共催によって募集されており、全国から多数の作品が応募されている。公開されている昭和41年以降の全入賞作品の中から印象深い作品を抽出してみた。

『ブレーキは早めに スピードは控えめに』	昭和41年内閣総理大臣賞
『のんだら のるな のるなら のむな』	昭和41年入選
『とび出すな 車は急に止まれない』	昭和42年内閣総理大臣賞
『ゆずり合う 心一つで 事故は0』	昭和43年佳作
『せまい日本 そんなに急いで どこへ行く』	昭和48年内閣総理大臣賞

最近の作では

『目的地「早く着く」より「無事に着く」』	平成23年警察庁長官賞
『スマホ手に 車や自転車 事故のもと』	平成25年内閣総理大臣賞
『こんばんは 早めのライトで ごあいさつ』	平成28年内閣総理大臣賞

交通事故死者数は昭和45年の16,765名をピークに減少に転じた。道路の整備等ハード面の改良の成果が中心であろうが、交通安全標語・スローガンも交通マナーの向上を促し、交通事故減少に寄与したと考える。

それなら日本語への意識を高めるための標語・スローガンを広く国民に募り、文化庁の「調査」発表時に合わせ、優秀作を表彰することにすれば、日本語の使い手である日本人、日本語を勉強中の外国人の関心を高めることになり、その結果、誤用を減少させ乱れや揺れの進行を遅らせる効果が出ると思われ標語・スローガンを考えてみた。

『あわてるな その表現は 誤解生む』
『伝えたい 自分の気持ちを 正確に』
『敬語の名手は人気者 話し相手を幸せに』

3. 誤用への関心を高めるスローガン

過去に「調査」で取り上げられた誤用の多い慣用句、並びに気になる言い方について個別にスローガンを考えてみた。

3-1 【うがった見方】

『うがった見方は 正義の見方』

「うがった見方をする」は悪い見方ではなく、正しく真髓をついているという良い見方である。「穿つ」とは「穴を掘る」ということであり、そこから転じて「物事を深く掘り下げ、本質を的確に捉える」「隠れた真相を見抜く」という意味である。ところが、平成 23 年度「調査」の結果は、余り良くない意味とする答えが本来の意味を大きく上回っている。また、分からないとの回答が 20%もあるのがこの言葉の特徴である。

H23

- ㉞物事の本質を捉えた見方をする㉞・・・・・・・・・・26.4%
- ㉟疑って掛かるような見方をする・・・・・・・・・・48.2%
- ㉞と㉟の両方・・・・・・・・・・2.1%
- ㉞と㉟とは全く別の意味・・・・・・・・・・2.9%
- ㉞分からない・・・・・・・・・・20.3%

探られる側の立場になると、本質に辿り着かれることや隠れた真相を見抜かれることへの抵抗感が高まる。その結果、この言葉を良くない意味で捉える人が増加しているとの分析がある。「うがった見方をしている」と上司が褒めても部下は喜ばず、人間関係が壊れる悲しい場面が目につかぶ。

3-2 【役不足】

『役不足 自ら言うのは 自己過信』

「役不足」はその人の能力に対して、与えられた役や役目が軽すぎること（本人力量>役）を言う言葉である。ところが逆に力量不足（本人力量<役）の意味で用いる人が半数を超えている。平成 14、18、24 年度の「調査」結果は下記である。

	H24	H18	H14
㉞本人の力量に対して役目が軽すぎること㉞・・・・・・・・	41.6%	40.3%	27.6%
㉟本人の力量に対して役目が重すぎること・・・・・・・・	51.0%	50.3%	62.8%
㉞と㉟の両方・・・・・・・・・・	2.5%	2.9%	2.8%
㉞と㉟とは全く別の意味・・・・・・・・・・	1.6%	0.3%	1.8%
㉞分からない・・・・・・・・・・	3.4%	6.2%	5.0%

「役不足ですが・・・」と発言しているケースを見ることがある。表情や前後の流れから考えると、不遜さは感じられず誤用であることは一目瞭然だが、表情が見えない場面では誤解を生むケースがある。

なお平成 14 年以降 10 年間に誤用が 11 ポイント減少しているのは、「調査」等で「役不足」が誤用の典型として周知された結果と考える。

3-3 【流れに掉さず】

『羽根田さん 流れに掉さし銅メダル』

リオデジャネイロ五輪のカヌースラロームで羽根田卓也選手が日本人初の銅メダルを獲得したことは記憶に新しい。カヌーのパドルを掉と呼んでいいのかは疑問だが、見事に流れに乗った結果だった。掉は舟を進めるために使う長い棒。保津川下りや天竜下りで船頭さんの掉捌きに観光客は歓声をあげる。流れに掉さすことで、勢いがつきそのスリルに更に歓声をあげる。ところが6割の人が、流れに逆らい、勢いを止めると間違っ理解している。

	H24	H18	H14
㊦傾向に乗って、ある事柄の勢いを 増すような行為をする㊦・・・	23.4%	17.5%	12.4%
㊧傾向に逆らって、ある事柄の勢いを 失わせるような行為をする・・・	59.4%	62.2%	63.6%
㊦と㊧の両方・・・	1.6%	1.5%	1.1%
㊦と㊧とは全く別の意味・・・	1.4%	0.3%	1.5%
㊦分からない・・・	14.2%	18.5%	21.4%

本来の意味で理解している人が 10 年間で 11 ポイント増加していること、また「分からない」との回答も 7 ポイント減少していることは、「役不足」と同じく誤用の典型と周知された結果と考える。

3-4 【情けは人のためならず】

『かけた情けは ブーメラン 巡り巡って自分の許に』

「情けは人のためならず」を人に情けを掛けて助けることは、その人のためにならないと理解する人が 4 割台半ばいる。本来は、掛けた情けは、巡り巡って結局は自分のためになるという意味。平成 12 年度と平成 22 年度の「調査」結果はほぼ横這いだが、若年層は 60% 近くが誤って理解しており、直近に調査すれば誤用の割合が増加していると予想できる。

	H22	H12
㊦人に情けを掛けておくと、 巡り巡って結局は自分のためになる㊦・・・	45.8%	47.2%
㊧人に情けを掛けて助けてやることは、 結局はその人のためにならない・・・	45.7%	48.7%
㊦と㊧の両方・・・	4.0%	(選択肢なし)
㊦と㊧とは全く別の意味・・・	1.9%	(選択肢なし)
分からない・・・	2.6%	4.1%

ブーメランは戻ってくるものの代表例。かけた情けはブーメランほど早く戻っては来ない、また投げ損うと戻ってこないケースもあることは覚悟しておかないといけない。

3-5 【姑息】

『落ち込むな 主治医から 姑息的治療と言われても』

姑息の「姑」は「しばらく」、「息」は「休息」の意味で、「しばらくの間休む」ところから本来は「一時しのぎ」の意味である。しかし「姑」のイメージが悪いのか「卑怯」と理解している人が7割を超えており、60歳未満では80%の人が誤って理解している。

	H22	H15
㊦「一時しのぎ」という意味㊦	15.0%	12.5%
㊧「卑怯な」という意味	70.9%	69.8%
㊦と㊧の両方	2.9%	4.7%
㊦と㊧とは全く別の意味	2.1%	1.7%
分からない	9.2%	11.4%

ところが、医療の世界では「姑息的治療法」という言葉が本来の意味で比較的よく使われている。根本的に治す治療法ではなく、「一時しのぎ」「症状の緩和」の目的で行われる治療法のことである。根治的治療が不可能な時や、リスクが大きい時は姑息的治療を継続し自己治癒力の回復を待つケースもあるという。

3-6 【耳障り・さわり】

『耳は聴覚 目は視覚 手肌と違ってノータッチ』

「耳ざわり」についての平成14年度の「調査」は圧倒的に本来の意味である「耳障り」を選んだ人が多かった。

	H14
㊦聞いていて気に障ること㊦	86.5%
㊧聞いたときの感じのこと	8.8%
㊦と㊧の両方	2.3%
㊦と㊧とは全く別の意味	0.6%
分からない	1.8%

しかし最近「手触り・肌触り・舌触りが良い」と同じように「耳触りが良い」と表現するケースが見受けられるようになった。素晴らしい演奏を聴いて「耳触りがよい音」との感想を述べると、その感想そのものを「耳障り」に感じる人が圧倒的に多いということを忘れてはならない。

「さわり」にも触れておこう。

『ミステリー さわりを読めば 謎解ける』

「さわり」は辞書を見ると、触ること以外に義太夫節の一曲の中で一番の聴きどころとされる箇所、転じて見どころ・聞きどころ、話や文章で最も感動的、印象的な部分とある。ところが平成 19 年度の「調査」では「話などの最初の部分のこと」と理解している人が半数を超え、60 歳以上を除いた世代では 6 割以上が誤用している。

	H19	H15
㉞話などの要点のこと㉞	35.1%	31.1%
㉞話などの最初の部分のこと	55.0%	59.3%
㉞と㉞の両方	2.7%	3.9%
㉞と㉞とは全く別の意味	0.2%	0.8%
分からない	7.0%	4.8%

ミステリーをさわりから読み始めると、ホームズもポワロも活躍の場を失ってしまう。

3-7 【噴飯もの・失笑する】

『食事中 笑う時には 口に手を 噴飯もの（失笑）のエチケット』

「噴飯もの」はおかしさの余り、口の中にある飯を思わず嘔き出して笑うことだが、平成 24 年度の「調査」では「腹立たしくて仕方のないこと」との回答がほぼ半数を占めた。

	H24
㉞おかしくてたまらないこと㉞	19.7%
㉞腹立たしくてたまらないこと	49.0%
㉞と㉞の両方	1.1%
㉞と㉞とは全く別の意味	2.8%
分からない	27.4%

分からないとの回答が 25%以上あるのもこの言葉の特筆すべき点である。

「失笑する」は平成 23 年度の「調査」では下記の結果となっている。こちらは 6 割を超える人が誤解している。

	H23
㉞こらえきれず吹き出して笑う㉞	27.7%
㉞笑いも出ないくらい呆れる	60.4%
㉞と㉞の両方	2.7%
㉞と㉞とは全く別の意味	4.1%
分からない	5.2%

「噴飯もの」は「噴」が噴射、噴火などから怒りを連想させ、笑いに結びつかない。「失笑」は「失」が失恋、失業などから失くすことを連想させ、笑いを失ったと誤解されたと推測する。この場合の「失」は失言、失火、失禁と同じく、抑えきれずに外へ出してしまふ、の意である。

3-8 【とんでもございません】

『かわいそうだよ とんでもない「とんでも」と「ない」に生き別れ』

「とんでもございません」という表現は「調査」では「気になる言い方」として取り上げている。結果は「気にならない」との回答が多数である。

	H25	H15	H7
㊦気になる・・・・・・・・・・・・・・・・・・	25.0%	17.8%	17.9%
㊧気にならない・・・・・・・・・・・・・・・・	57.5%	68.3%	78.7%
㊨どちらとも言えない・・・・・・・・・・	16.9%	12.8%	2.3%

「とんでもない」は「やるせない」「かたじけない」「だらしがない」などと同じく一語である。ところが「とんでもない」の「も」が悪さをしているのか、「ない」が離れ「ありません」「ございません」と置き換えられ、丁寧表現として使われるケースが増えている。

文化審議会は平成 19 年 2 月の『敬語の指針』で、「とんでもございません」（「とんでもありません」）は、相手からの褒めや賞賛などを軽く打ち消す表現であり、現在では、こうした状況で使うことは問題がないと考えられると答申した。更に、正しいとされる「とんでもないことでございます」は「あなたの褒めたことはとんでもないことだ」という意味にも受け取られるおそれがあるので、注意を要する表現であるとしている。

しかし「調査」の結果を見ると、平成 25 年度の「気になる」は 10 年前より 7 ポイント増加、「気にならない」が 21 ポイント減少している。直近でもこの傾向が続いているなら、指針が先回りし過ぎ「とんでもない」ことをしたのかもしれない。

3-9 【「ら」抜き言葉】

『いつまで続く不統一 音声「ら」抜き テロップ「ら」入り』

文化庁が平成 28 年 9 月 21 日に平成 27 度の「調査」を発表すると、翌 9 月 22 日の朝刊各紙が『「ら」抜き言葉多数派に』と大きく取り上げた。「ら」抜き言葉に関しては日本語の乱れの象徴的な存在となっているので最後に取り上げる。

(1) こんなにたくさんは食べられない

	H27	H22	H12	H7
㊦食べられない・・・・・・・・・・・・・・・・	60.8%	60.2%	67.7%	67.3%
㊧食べれない・・・・・・・・・・・・・・・・	32.0%	35.2%	25.5%	27.2%
㊨どちらも使う・・・・・・・・・・	6.8%	4.0%	6.3%	5.0%
㊩分からない・・・・・・・・・・	0.4%	0.6%	(選択肢なし)	

(2) 朝 5 時に来られますか

	H27	H22	H12	H7
㊦来られる・・・・・・・・・・・・・・・・	45.4%	47.9%	54.2%	58.8%
㊧来れる・・・・・・・・・・・・・・・・	44.1%	43.2%	33.8%	33.8%

㊦どちらも使う・・・・	9.8%	8.1%	10.6%	6.3%
㊧分からない・・・・	0.7%	0.9%	(選択肢なし)	

(3) 彼が来るなんて考えられない

	H27	H22	H12	H7
㊦考えられ・・・・	88.6%	88.2%	88.7%	88.8%
㊧考えれ・・・・	7.8%	8.1%	5.9%	6.7%
㊦どちらも使う・・・・	2.9%	2.3%	4.1%	3.1%
㊧分からない・・・・	0.8%	1.3%	(選択肢なし)	

(4) 今年は初日の出が見られた

	H27	H22	H12	H7
㊦見られた・・・・	44.6%	47.6%	(選択肢なし)	
㊧見れた・・・・	48.4%	47.2%	(選択肢なし)	
㊦どちらも使う・・・・	6.5%	4.9%	(選択肢なし)	
㊧分からない・・・・	0.4%	0.3%	(選択肢なし)	

上記に示した通り「見れた」が「見られた」を上回り、他に「出れる(45.1%)も「出られる(44.3%)を上回ったことが話題になった。

話し言葉における「ら」抜きはこの「調査」の数字以上に浸透していると感じている。テレビでは出演者の多くが「ら」抜き発言をしているが、テロップでは「ら」入りとなっているケースが多い。可能・尊敬・受け身表現とも「られる」となるより、可能表現は「ら」抜きの方が分かり易いとの考え方もあり、今後も「ら」抜き言葉の勢いが衰えることはないと思う。画面とテロップの食い違いを「ま」抜けに感じる時も近い将来やってくるであろう。

4. まとめ

冒頭に記したように日本語が乱れている、揺れていると懸念する声は以前からある。「調査」の初年度である平成7年には既に「ら」抜き言葉と「とんでもございません」が取り上げられており、平成11年には85.8%が「日本語は乱れている」と回答している。20年前の「調査」スタート時点での情勢である。流石に清少納言までは遡らないが、近世では芥川龍之介が「澄江堂雑記」で『肯定に伴ふ「とても」は東京の言葉ではない。東京人の古来使ふのは「とても及ばない」のやうに否定に伴ふ「とても」である。近来は肯定に伴ふ「とても」も盛んに行はれるやうになった。』と「とても」について嘆いている。

四季の変化に応じて日本の風景は姿を変える。空、雲、風、草花、樹木、鳥、虫、行事、旬の食べ物、衣服等々が変化する。それらの変化を的確に表現する日本語の豊富さと美しさには敬服する。「雪」だけをみても、淡雪、大雪、小米雪、粉雪、小雪、細雪、根雪、初雪、餅雪・・・書き出すと切りがないが、日本の冬、初春の風景が目につく。この柔軟な日本

語は他の変化の要素にも寛容である。

平成 25 年度の「調査」に「サボる」は 86.4%の人が、「チンする」は 90・4%の人が使ったことがあると答えている。「怠ける」「電子レンジで加熱する」は明らかに少数派であり、ここまで定着するとこれらの言葉に乱れや揺れを指摘する声は聞かない。最初の僅かな揺れや乱れが大きな変化となり、やがて定着する。今回取り上げた中で「とんでもございません」や「ら」抜き言葉はこれに該当すると考える。個人的には「気になる」言葉だが、「気にならない」言葉派が多数を占め、「ら」抜き言葉はいずれ「日本語の乱れ」の象徴的地位から陥落するであろう。

問題は誤解が生じる誤用である。話し手と聞き手、書き手と読み手の間に存在する日本語が要因となる誤解は、日本語の使い手としては出来る限り減らしたい。昨今文章を書く人口が増えている。手紙など書いた経験のない人物同士がメールやラインを交換している。ビジネスの世界でもメールが頻繁に遣り取りされ、書類まで添付されている。ツイッター、フェイスブック、ブログ等で近況や自分の主張を発信している人も多い。これらの中に誤用があると、誤解が今まで以上のスピードで拡散し、無用な論争が生じ、所謂「炎上」となる。今回これらを防ぐために、スローガンを作る提案をしてみた。最後に次のスローガンでこのレポートを締めたい。

『繋げたい 日本の良さを 言葉に込めて』

『次世代へ 言葉のリレー 楽しもう』

『文章読本』に学ぶ（文体をたずねて）

加 茂 豊

1. はじめに

いつごろのことだろうか、文体の語が頭に引っ掛かっている。何気なしに文章を書いてきたが、大事なことを知らないままではあるのではないか。いちど足をとめて、文体を考えたい。

文体の森へ入るには、たくさんの入口があるらしい。引っ掛かりを感じたのは、作文するおりだったから、文章を書く心得についての指南書（『文章読本』）を読んで、文体を探ることにする。

2. 調査・研究の方法

文体を探る目的のために、次の手順によって調査し考察を深めた。

- (1) 10冊の『文章読本』を選ぶ。
- (2) 10冊を読んで、2方面から「抜き書き」を作る。2方面は次の通り。
 - ①『文章読本』について（著作の狙いなど）
 - ②文体について
- (3) 「抜き書き」から学ぶ。

3. 選んだ『文章読本』

選んだ『文章読本』を刊行順に並べると、次の通り。表題に文章読本の言葉を含む本のなかから、切りのいい10冊を選んだ。なお、伊藤整は編著であり、吉行淳之介は選著である。

また10人中、向井敏ひとりが文芸評論家で、他の9人はすべて作家である。

- ・『文章読本』谷崎潤一郎著 1934年 中央公論社
- ・『文章読本』菊池寛著 1937年 モダン日本社
- ・『新文章読本』川端康成著 1950年 あかね書房
- ・『文章読本』伊藤整編 1954年 河出新書
- ・『文章読本』三島由紀夫著 1959年 中央公論社
- ・『文章読本』中村真一郎著 1975年 文化出版局
- ・『文章読本』丸谷才一著 1977年 中央公論社
- ・『自家製 文章読本』井上ひさし著 1984年 新潮社
- ・『文章読本』吉行淳之介選 1988年 ランダムハウス講談社
- ・『文章読本』向井敏著 1988年 文藝春秋

4. 考察

上記の手順で述べたように、まず2方面から抜き書きを作る、そして方面別に学んだことを箇条書きで示す。

4-1. 『文章読本』について（著作の狙いなど）

① 『文章読本』の目的

日本人が日本語で文章を書くための心得を示す。谷崎は「自分の長年の経験から割り出し、文章を作るのに最も必要な、そうして現代の口語文に最も缺けている根本の事項のみを主にし、この読本を書いた。」という。

現代の口語文が明治中期に成立してから約40年が経ち、漢字文化圏にある日本が明治大正昭和の三代にわたり積極的に西洋文明を摂取してきた経過を踏まえて、文豪谷崎は素人にも分かるようにと本を書き、文章作法の骨格を示して『文章読本』作者の魁となった。

以下8人の作家が続き、内外の名文を引用しながら、あるいは蘊蓄を傾けて網羅的に（丸谷・井上）あるいは重点項目的に（中村）、趣向を凝らして文章論を展開している。課題の整理型（伊藤・吉行）、精読者こそ良い書き手になるとして読む側からの視点（三島）など、それぞれ読み応えのある著作になっている。向井は、引用文献の選び方や論点の鮮やかさで力を示し、文芸評論家として気を吐いた。

② 言語とは何か。そして文章とは何か。

まず文章の要素たる言語に目を向けて、谷崎は「言語は思想を伝達する機関であると同時に、思想に一つの形態を与える、纏まりをつける、と云う働きを持つ」と宣言し、一方で「言語や文章はただ物事を暗示するだけの働きしかない」とその限界を教える。

言語は伝達機能を持ちながら、しかし満点を取ることはできないという要所に注意を促している。同じように井上は

つまるところ印象に残ったのは、易経の総論といわれる『繫辞伝』の中の次の文章である。

書は言を盡さず、言は意を盡さず。

鈴木由次郎博士によれば、書は文字のこと、言は言語のこと、そして意は心に思うところ、思想や感情のことだそうで、そこで通釈文は次のようなことになる。

文字はいくら詳しくこれを書いてもことばで述べることを余す所なく書き尽すことは不可能である。言語はいくら詳しくこれを述べても心の中に思っているところを遺憾なく述べ尽すことはとうていできない。

と書く。

文字・言語・文章のいずれもが、自分の思いや考えを伝える貴重な道具ではあるものの、限界を持つことが知られる。それでこそ、意を尽くさんがため、人は文章作法の習練に励んできたのであろう。文字を知らなかった日本へ千数百年前に漢字が伝えられ、後のカタカ

ナ・ひらがなの発明により文字の表現方法が和風にひろがり、今日ではローマ字も加わって、日本語の文章は多彩になっている。

③ 現代口語文の歴史を知る。

わが国の散文について、学校で教わった作品を振り返ると、土佐日記（936年？）、源氏物語（1008年？）、平家物語（13世紀）、太平記（1371年？）、「奥の細道」（1702年）、「心中天網島」（1720年）などと和文調あり漢文調あり。文章様式の中軸は、漢字とかなを交ぜ合わせた和漢混交文である。しかしどの文章も、今日使われている口語文とはかけ離れている。離れている分だけ、古文を読解するためには、古語辞典を調べたり古文・文法をひもといたりする手間がかかる。

明治維新は、「歓迎！近代西洋文明」と旗幟を鮮明にした。文明開化と呼ばれる。中村は、谷崎が積み残した仕事（近代以降の名文、その豊富な実例を訪ねること）を引き受けて、近代百年に及ぶ口語文の歴史を洗い直し、口語文のあけぼのを次のように描いている。

ひとつの文明の初期の段階では、多分、人は「話す言葉」と「書く言葉」とのあいだに、あまり大きな区別はしなかったでしょう。ところが、その社会が発達するにつれて、「書く言葉」の方は、次第に精練され、巧緻になり、合理的にも美的にもなって行って固定し、一方、「話す言葉」の方は、絶えず社会の変動に伴って変化して行きます。

明治維新の頃は、文章語、文語は、一般に漢文——これは極東諸国の文明的共通語でした——の影響を受けた、格調高いものに完成し、一方、市民の話し言葉は、かなり柔軟な、ニュアンスに富んだ、感覚的なものに進化していました。

そうして、この文語と口語との差は、いちじるしく開いてしまっていました。（中略）

これほど極端な開きがでてくると、人々はもう一度、文語を口語に近づけようと考えようになります。

そうして、明治のはじめから、口語を文章語にまで高めようという、「口語文」の試みが始まります。今日、私たちが日常に書いている文章、また新聞記事など、皆、この明治以来の口語文なのです。

現代の口語文が、明治以来の口語文だと明かされる。話す言葉と書く言葉について、それぞれの成長・発展、そして両者が疎遠になってしまった故に、口語を文章語にまで高めようという口語文の創生機運が生まれた経緯は、面白い。わが国の小説第一号「当世書生気質」（坪内逍遙著 明治18年）は講談調の文体で書かれ、対抗した「浮雲」（二葉亭四迷著 明治20年）・「あひびき」（二葉亭四迷訳 明治21年）は言文一致体をめざす。名訳とされる「即興詩人」（森鷗外訳 明治25年）は擬古文、「たけくらべ」（樋口一葉著 明治28年）は雅俗折衷体で世に出た。小説、新聞、評論などの様々な分野で、新しい文体について無数の実験がおこなわれた。最大のテーマは、感覚に優れる話し言葉と論理優先の文章語の統一、これである。

（注）擬古文：江戸時代の中期から明治初期まで続いた和文体の一つ。「雅文」とも言う。

平安時代の雅の文章を純正なる日本文と考え、そこに立ち返ろうとして、賀茂真淵・本居宣長・村田春海ら国文学者が復古思想の文芸運動を展開した。

(注) 雅俗折衷体：地の文を文語体で記し、会話の部分を口語体で述べるなど、雅語と俗語とを交ぜて書く文章表現上の一様式。明治時代の文章について言う用語。

④ 小説家が口語文をつくった。

丸谷から引用する。

現代日本文においては、伝統的な日本語と欧文脈との折合いをつける技術がとりあへず要求されてゐるわけだが、それが最も上手なのはどうやら小説家であつたらしい。宗教家でも政治家でもなかつた。学者でも批評家でもなかつた。歴史家でも詩人でもなかつた。小説家がいちばんの名文家なのである。当然のことだ。われわれの文体、つまり口語体なるものを創造したのは小説家だつたし、それを育てあげたのもまた小説家なのだから。

随分と明け透けな物言いであり、どきっとする意見だけでも、どうやら事実のようである。明治維新以降に、話し言葉のなかから文章を作ろうという運動が起こってきたとき、小説家がいちばん熱心であつた。この課題解決に対して、ぴったりの適任者が登場する。学者であると同時に小説家でもある二人。中村は言う。「日常、論理的な文章（論文）と情緒的な文章（文学）とを書き分けて暮しているので、文語文と口語文との、それぞれの長所も短所もまたそれぞれの可能性も、それから両方の文体の接点や融合の勘所というものを、よく心得ている」と。森鷗外と夏目漱石のことである。ドイツ留学（4年余）の医学者・森鷗外とイギリス留学（2年余）の英文学者・夏目漱石。二人とも漢籍に通じていたこと、外国語に堪能で海外文学の翻訳に力を発揮したことなども興味深い。この二人が、口語体のなかへ文語体を吸収させる仕事で大きな役割を果たすことになった。時代の切所で名人が現れるという歴史の妙に感心する。

丸谷が断言してから40年、目ぼしい反論は聞かれない。『文章読本』のタイトルが作家の専売特許の観を呈している事情は、どうやらこの辺りに潜んでいる。

⑤ 良い文章を書くためには、良い文章を読むこと。

作文の極意はただ名文に接し名文に親しむこと、それに尽きる。『文章読本』作者の10人が言うことは、みな同じである。精読者（前述）の解説も含めて、三島の言に耳を傾けてみよう。

チボーデは小説の読者を二種類に分けております。一つはレクトゥールであり、『普通読者』と訳され、他の一つはリズールであり、『精読者』と訳されます。チボーデによれば、『小説のレクトゥールとは、小説といえはなんでも手当たり次第に読み、[趣味]という言葉のなかに包含される内的、外的のいかなる要素によつても導かれていない人』という定義をされます。新聞小説の読者の大部分はこのレクトゥールであります。

一方、リズールは『その人のために小説世界が実在するその人』であり、また『文学というものが仮の娯楽としてでなく本質的な目的として実在する世界の住人』であります。リズールは食通や狩猟家や、その他の教養によって得られた趣味人の最高に位し、『いわば小説の生活者』と言われるべきものであって、ほんとうに小説の世界を実在するものとして生きて行くほど、小説を深く味わう読者のことでもあります。私はこの『文章読本』を、いままでレクトゥールであったことに満足していた人を、リズールに導きたいと思っははじめるのであります。これはまったく一作家にすぎぬ私にとって僭越な言葉であります、作家たることはまたリズールたることから出発するので、リズールの段階を経なければ文学そのものを味わうことができず、また味わうことができなければ、自分も作家となることができません。

ここでもう一つ、『文章読本』作者の多くが、伝統を学べと強調していることに触れる。彼らは、文明開化以来、日本人はわが国の良き伝統を乱暴に投げ捨ててきたと考えている。

「われわれは、生な現実をそのまま語ることを卑しむ風があり、言語とそれが表現する事柄との間に薄紙一と重の隔たりがあるのを、品が良いと感ずる国民なのであります」と谷崎が言うとき、ハイカラに拝跪する世相への非難が込められている。そして彼は「陰翳礼賛」・「春琴抄」・「細雪」・「源氏物語」現代語訳などの作品を発表して、有言実行の手本を示した。

文字・言葉・文章は、伝達を第一義として人間が発明した。これらが伝達機能として成立するためには、社会の認知が不可欠である。社会（多くの人々）が認める過程には、長い時間を要するだろう。成立した文字・言葉は伝統の塊であり、文章は伝統の集中である。そのように考えると、今日まで伝わってきた文章（一方で、忘れられ埋もれてしまった文章は、文字通り数えきれない）から学ばずして、新しい文章を記すことなど出来ない。文字を選び言葉を選び文章を作るとき、先人から九十九までを学び、自力で残りの一を足すことが出来れば幸甚である。

4-2. 文体について

① 文体論は百家争鳴で、文体の定義は定まらない。

井上が「数百の文体論の理論書をわずか数行の実践心得に凝縮するという離れ業」と評した、丸谷の一節を引用する。

文体といふ言葉にみんながいろんな意味を勝手に付与したため收拾がつかなくなつたといふ事情は、今日、誰でも知っている。一つにはその混乱を整理するために敢へて言ふのだが、この言葉の中心にあるものは文章を書くに当つての気取り方である。つまりわたしが前に言つた、ちよつと気取つて書くといふこと、あるいは、気取らないふりをして気取るといふこと、それこそは文体の核心にほかならない。文体にとつてとりあへず必要なのは装ふといふ心意気、次に大事なものは装ふ力なのだ。なにがしといふ新進作家に文体が認めがたいのは、彼の文章の気取り方が恰好がついてゐないからである。そしてなにがしといふ文豪の文体が嘆賞に値するとすれば、それは彼の気取り方、装ひ

方が途方もなく趣味がよいからである。さう考へれば、すべては納得がゆくのではなからうか。(中略)

文体の妙は千変万化、そのさまざまの様相をいちいち追ふのは大変な作業だし、それを概括しようと企てるのは無謀なことだらう。いつそ諦めるほうが賢いにちがひない。しかし、文体の基本にあるものは何かといふ間に答へることなら易しい。公的なものこそはそれである。文章の歴史をかへりみて言へば、文体の核心部に位置を占めるのは私的なものでは決してない。そのへんのことは、レトリックといふ文体の主要な構成要素が公的な叙述を契機にして発生したことでもおほよそ察しがつくだらう。すなはち言ひまはしの型は、弁論とか正史とか、公的な文章を書くに当つてそれを効果的にするために生じたものなのである。

「文体の定義が定まらない」事情を語り、文体の核心は文章を書くに当つての気取り方だと実践論を説き、文体の心臓部に位置するレトリックは公的な文章(弁論や正史)に由来するという歴史的認識までが披瀝されている。

思うに、日本の立ち位置もこの事情に作用しているのではないか。外来文明の吸収者と言う立場のことである。いつとは知れぬ古代に大陸から漢字(千字文など)と漢文(仏典・論語など)が伝えられ、もちろん一級の中国文明が同伴していた。文字を知らず仰ぎ見る恰好のわが先祖は、教えられる文字・文章を先ずはそのままの形で受け止めるほかに術がなかった。元からの和語と外来の文字・文章との間に、どのように折合いをつけたのか。文章も歌もすべて漢字で書かれている、わが国最古の歌集「万葉集」に格闘の實際を窺うことができる。

漢字伝来から数百年のちに、万葉仮名から発展させてカタカナやひらかなを発明し、ようやく源氏物語を生みだしたころには、500年以上の時が経過していた。文字を知り、これを改変し、世界に通用する物語を作り出すためにかかった時間である。古代から一足飛びして、近代の文物知識を西洋から仕入れた明治時代をみても、事情はあまり変わらない。江戸期からの戯作が実学(福沢諭吉「学問のすゝめ」などで代表される)に気おされて低迷していたわが国へ、シェークスピア・ユーゴー・ゲーテ・トルストイなど大家の翻訳文学が洪水のように押し寄せてきた¹⁾。わが父祖たちは、これをありがたく押し頂くほかはない。

『文章読本』から離れて、すこし寄り道をする。

文体の出自について、『字通』(白川静著 1996年 平凡社)では、「文章の体様・様式。〔宋書、謝靈運伝論〕漢より魏に至るまで四百餘年、辭人才子、文體三變す」とあり、宋書(西紀500年頃成立)に用例が見えるので、文体は漢語である。

文体の語釈について、日本語学者からの説明をみておく。『日本語の文体・レトリック辞典』(中村明著 2007年 東京堂出版)では、「文章の表現上の性格を他と対比的にとらえた特殊性。文体を類型面でもとらえるか個性面でもとらえるかによって大きく二分され、現実に

¹⁾ 戯作：近世後半における一連の小説作品をさす。様式でいえば、洒落本、滑稽本、黄表紙、合巻、読本、人情本を含む。

次のように多様な意味で用いられている。」として17項目をあげる。そして「もう一步踏みこめば、真正な意味での文体は、読者のスタイルがつかみとった言語面での作者のスタイルであり、その背後に感じとった人間の考え方、ひいては生き方である、とすることができよう。」と書いている。

文体が、文章の体様・様式から出発して、西洋文明の洗礼を受けたのちに多義化している様子が見てとれる。なかなか一言ではすまない。

現代口語文が誕生して百年ならば、未熟を嘆くには当たらない。紫式部の源氏物語は、漢字到来して500年後に現れた。文化先進国の単純な模倣から脱して、日本人が文章・文体を自前の物とするためには、年月を要して当然と言える。

しかし、インターネットというコミュニケーション・ツールが新たに登場して、今日の言語世界が複雑化していることが気にかかる。

② 文体は表現者の顔である。

安岡章太郎（吉行淳之介選『文章読本』から）が言う。

だいたい、“文体”という言葉自体が、われわれの間で、ひどくアイマイであり、思想とはなれて文体という特殊な物件がポツンと存在しているという考え方自体に、おかしなところがある。（中略）

話が脱線しているように思われるかもしれない。ただ、文体が個性、ないしは人格と、直接結びついたものだというアタリマエのことさえ、いかに現代の私たちのなかでは忘れられているかという事例は、これはもう一度考えなおしてみたいことではないか。

金井美恵子（吉行淳之介選『文章読本』から）が言う。

それでは、いったい、〈文体〉とは何か。

それはまず作者に固有なもの、交換不能な固有性として考えられる。ある特定の〈文体〉を模倣することは出来るし、わたしたちはある作家の〈文体〉を真似することで文章を書きはじめさえするのだが、それではまだ〈一人前〉の〈作家〉にはなれない。

まず〈文体〉だ。もちろん、そのまえに、〈表現〉するに真に足る実質的なものがなければならぬ。思想であれ体験であれ、夢であれ、幻想であれ、世界であれ、それは、まあ何でもよい。そして固有の、〈表現〉される〈実体〉にふさわしい〈文体〉を発見し、自己のものとして確立することによって、人は〈作家〉になる。

文体と主に作家の関係について書かれているが、安岡と金井の言うところは同じである。文体は、作家の思想や人格と直結している。この意味において、文体は表現者の顔である、とすることができよう。子供の顔はさておき、大人の顔は本人が責任を持つ。だとすれば文体を疎かにはできない。

③ 独特な文体で書こうとする意識的な努力が、非常に弱くなっている。

小林秀雄（伊藤整編『文章読本』から）が言う。

文体の喪失は、現代文學の顯著な特徴である。文体といふ言葉は、観察といふ言葉に置き代へられて了った。みな巧みに書かうとするより寧ろ正しく見ようとする。ひと口で言へば、作家達は、独特な文体の代りに正確な観察を置き代へることにより、言語を観察書と観察対象との單なる中間項のやうなものにして了ったのである。作家たる以上、成熟するにつれて、いづれは独特な文体を否應なしに持つことになるのだが、独特な文体で書かうとする意識的な努力は、非常に弱くなった。

この指摘は、文章が伝達の機能と同時に表現の機能を持つ点に注意を喚起している。見た、書いた。対象をそのまま写しました、では意味がない。眼を開いていれば、あらゆる物事が見えている筈であるのに、後になって何を見たのか思い出せないという経験は誰にでもある。表現者はまずしっかりと目を凝らして対象を掴まえること、次に読者にしっかりと分らせることである。表現者から読者へ、確実に伝達をするための工夫が大事になる。

自分が掴まえた内容を語るための表現、読者に目を開かせるための表現、そこに独特な文体が要求される。自分の呼吸で、自分の言葉で、そして言葉づかいを凝らして文章を綴る。無から有は生まれない。自分のなかに詰まっているものから、選びだした言葉で紡ぎだすしかない。自分のなかへ詰め込んでおきたいものは、山なす名文。暇を見つけては、名文を読んでおきたい。

④ 言いたいこと（ワクワクすること）があつてはじめて、文体論は始まる。

井上から引用する。

彼が眞の文体を獲得するのは、彼が彼なりに人生の眞実のようなものを発見したときだろう。発見というくらいだから、彼にとっては新しい。その新しさが彼を生き生きとさせる。生命がおどる。その生命の躍動が彼の文章の『形式』に衝撃を与える。衝撃によってこわれかかった『形式』で、発見を掬いあげようとする。そしてどうやら掬いあげること成功したとき、彼の文章は文体になっているのだ。『人生の眞実のようなものを発見したとき』などと抹香くさいことをいったが、生命がおどるようなことならなんでもいいのではないか、とおもう。

文体論と書いたけれども、文章論と言葉を置き換えても、道理は同じである。文章を綴る前段に、「これが言いたい」が来なければならぬ。「謎はこれである」「自分はこうして謎を解いた」が、文章を綴る出発点になる。書くべきこと、語るべきことがあるときに、言葉が流れ出して文章が生まれる。

⑤ 文体は読者の骨の髄まで染みこみ、殆ど生理的なもの、その人の体質となってしまう。

最後に、文体の効果、すなわち読者への浸透力を忘れてはいけない。

向井から引用する。

奥本大三郎の『虫の宇宙誌』のなかに「昆虫図鑑の文体について」という章がある。昭和年代になってから行われた日本の蝶類図鑑のベストセラー三種の説明文の文体の差異を論じた珍しいエッセイで、これがそうざらに見当たらない出色の文章論。

その三つの蝶類図鑑というのは、昭和八年に出た平山修二郎『原色千種昆虫図譜』（以下「平山図譜」と略記）、昭和二十九年に刊行された横山光夫『原色日本蝶類図鑑』（「横山図鑑」と略記）、それに昭和五十一年に成った川副昭人 / 若林守男『原色日本蝶類図鑑』（「川副・若林図鑑」と略記）のことである。

「平山図譜」戦前（昭和 8 年）

ジャコウアゲハ（ヤマジヨラウ）

雄ハ黒色、尾端ノ総毛ハ紅色、麝香様香気ヲ発ス。山地、平地ニ普通。幼虫ハががいも、うまのすずくさ、あをつづら等ヲ食ス。本州、四国、九州、朝鮮、琉球、台湾ニ産ス。

「横山図鑑」戦後（昭和 29 年）

じゃこうあげは やまじょろう

その名のように雄は芳香を放ち、雌の翅色は灰褐色、後翅の半月紋は雌雄共に赤・橙の 2 種の系統があって、見るからに南国情緒豊かな蝶である。長い尾状突起を振りながら、そよかぜにのって緩慢に、樹間や路傍の花上を舞う姿は「山女郎」の名のごとく、絵のような美しさである。（中略）蛹は「お菊虫」と呼ばれ、後手に縛された姿にも似て「口紅」に似た赤い斑点さえもひとしお可憐である。

「川副・若林図鑑」現代（昭和 59 年）

ジャコウアゲハ

〈生態〉本州中部以北の地域では年 2 回、4 月下旬より出現する。南西部地域では 3 回と推定されるが詳細は不明。南西諸島では周年発生している。成虫はゆるやかに飛び、ヤマツツジ、ウツギ、ノアザミ、トベラなどの花で、吸蜜する。南西諸島を除いて越冬態は蛹で、食草から離れた人家の軒下、納屋・堀・石垣、枯枝や下草に蛹化していることが多い。

奥本大三郎の手柄は、他の分野、たとえば文学というジャンルでだと、数知れぬ逸話や例外に眼を奪われて見きわめのつけにくい文体変遷の一般的事情を、それぞれの歴史的時期に一種ずつしかない蝶類図鑑の説明文という絶好の材料に拠ってありありと描き出してみせたことだが、しかし、『昆虫図鑑の文体について』が文章論としてすぐれているのはそのせいだけではない。文体というもの、文章というものが、読者の人間形成にいかにかかわってくるかということ、『川副・若林図鑑』の文体批判を通じて、じつに説得的に語りおおせていることを言わなくては当を失しよう。

筆者なりに纏めるところなる。奥本の手柄の第一は、ジャコウアゲハの説明文を例にとって、3 つの時代にわたって文体の比較を試み、戦前（昭和 8 年）・戦後（昭和 29 年）・現代（昭和 59 年）という、文体の推移を見事にとらえたことである。「平山図譜」は、簡潔で乾

燥度の高い漢文訓読体の文章。颯爽としたリズムとイメージを喚起する力を持っており、筆者には三国志の張飛を連想させる風格がある。「横山図鑑」は、文学的形容をふんだんにちりばめた、いたって情緒的な解説。優しさ、暖かさといったものがたちのぼってくるような気配がある。「川副・若林図鑑」は、描写することをやめ、日本の蝶類学のレベルの高さを示す研究書であるが味気ない。前述した小林見解の実物見本と言える。描写をしないのだから、独特の文体など問題外である。

文体というものが、時代の空気（日中戦争さなか、戦後復興の明かり、経済先進国の仲間入り）を映しているということだろう。

手柄の第二は、文体が読者に及ぼす影響について分かりやすく説明したことである。それぞれの図鑑を手にとった少年少女のドキドキ・ハラハラはどうなるか。表現者は想像力を持って文章を作らなければならない。

5. 結び

・この数か月間、『文章読本』と文体を堪能した。今、文体の像が、自分の前にぼんやりと浮かんでいる。

しかし一番の収穫は、先人の苦勞を覗きみて、感謝の念が湧いてきたことであろう。漢字から出発して、かなを発明した日本人のことである。オリジナルを改造する能力に感心する。こう書きながら、「日々改善 日々前進」（勤めていた会社の懸賞標語）を思い出した。日本人の気性にあい、よくできている。

・これからしてみたい事は、素読である。意味を考えないで、文字だけを声に出して読むこと。

「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」。詩は好い。

なぜ〈剥ぐ〉も〈接ぐ〉もハグなのか

上野和美

1. はじめに

昨年度、〈むく〉〈はぐ〉〈めくる〉〈まくる〉の使い分けについて調べ、レポートを書いた。その調査を進める中で、気になることがあった。それは〈はぐ〉という語についてである。辞書で〈剥ぐ〉を調べると、たいてい〈接ぐ〉が見出し語として隣に挙がっていた。表面から何かを分離する意味の〈剥ぐ〉と、薄い物の接着を意味する〈接ぐ〉。分離と接着という一見正反対のこの二つの語が、なぜ同じハグという音^{おと}で表されるのか、不思議に思った。

異字同訓は、大和言葉としては同一であったというものが多い。中国では異なる概念の語として認識され、それぞれ別の漢字で表されていたが、日本ではそもそも区別などしていなかった、という語である。つまり、漢字の字義と大和言葉の語義が一对一で対応していないために生じることである。例えば〈はかる〉や〈うつす〉〈かわる〉がその典型で、漢字が複数あり、使い分けの基準も一応は存在するが、明確ではない。〈はかる〉を表す漢字は『大漢語林』で 33 種、『大漢和辞典』では実に 137 種もある¹⁾。中国語でこれだけ存在する字（＝語）を、和語では〈はかる〉の一語で賄う。もとが一つなので、使い分けの境界は曖昧である。さらに、〈すむ（済む・澄む・住む）〉や〈め（目・芽）〉など、現在の日本語では使い分けが明確であっても、遡れば一つの共通の概念を表したとされるものもある。

このようなことを前提としたとき、〈剥ぐ〉も〈接ぐ〉も、一つのハグに辿り着く可能性がある。語の由来としてそれはあり得るのか、もしあるなら二つの語に共通するものは何なのか探してみたいと思った。語源に関しては現存する文献資料が一三〇〇年前までの日本語が限界なので、正解を知ることはもちろん不可能である。しかし、抱いた疑問について、何らかの答えを示してくれるような説に出会えるかもしれないと考えた。

2. 辞書の記述

まず、国語辞典で二つの語がどのように説明されているか、確かめておく。『明鏡国語辞典』を取り上げる。ただし、ここでは、辞書の記述は〈剥ぐ〉と〈接ぐ〉との関係にかかわる部分だけを挙げる（以下の辞書も同）。

【剥ぐ】表面をおおっている物や表面に付着している物をむきとる。はがす。

「樹皮〔殻〕を-」「シール〔壁紙〕を-」「生爪を-」「化けの皮を-」

【接ぐ】〔やや古い言い方で〕布や板をつぎ合わせる。つぐ。

「ほころびに別布を-」「小切れを-・いで座布団カバーを作る」

▶「継ぎはぎ」「かけはぎ」などの複合語に残る。

¹⁾ 『大漢和辞典』の 137 種は、笹原宏之『訓読みのはなし』による。

〈接ぐ〉は、特記されているように、現在では単独の語として用いられることはほとんどない。衣類を補修する際の「継ぎ接ぎ」や「掛け接ぎ」が、〈接ぐ〉を含む語として残っている程度である。それとて「継ぎ接ぎ」「掛け接ぎ」という行為そのものが日常的でなくなった昨今、理解語としての地位も脅かされていると思われる。

次に語源についてどのような記述があるのかを見る。『日本語源大辞典』は、〈剥ぐ〉は(1)「ハ(端)の活用〈『大言海』〉」、(2)「ハは刃の義。グは活用語尾〈『日本古語大辞典』松岡静雄〉」、(3)「ハナシキ(離来)の義〈『名語通』〉」、(4)「ヘク(隔転)の義〈『言元梯』〉」の説があるとしている。他方、〈接ぐ〉は「ハ(間)を着け合わす義〈『国語の語根とその分類²⁾』大島正健〉」としている。

この説の一つ一つを辿っていくべきだろうが、全ての原典にあたるのは困難であり、また、そもそも上記の情報以上のことは得にくいと思われる。そこでハグへのアプローチは次の二つにしぼりたい。一つは、上記の中で比較的系統立てて説明している大島正健『国語の語根とその分類』を見ることである。もう一つは、上記の語源情報からハグは名詞ハに活用語尾グが付いたという説が存在すると考えられるので、その部分を中心に、大島以外の文献の記述を調べることである。それによって〈剥ぐ〉と〈接ぐ〉の両方に共通することがないかを考察する。

3.1 大島正健『国語の語根とその分類』の説

大島によるとハ行の言葉は「パチパチ(撥)の音より出でたる諸語」、「パラパラ、パタパタ(掃ひ・打つ)の音より出でたる諸語」、「パンパン(膨脹)の音より出でたる諸語」、「ハユル(映)に因む諸語」、「ハの雑語」の五つに分類され、その「パチパチ(撥)の音から出でたる諸語」は、さらに

- ①ハ(端)を基とする諸語
- ②ハナ(撥)を基とする諸語
- ③ハ(間)を基とする諸語
- ④ハ(不完・不整)を基とする諸語
- ⑤ハ(速力)を基とする諸語

に分けられるという。

- ① のハ(端)は、「撥ねて距離を生ずる意より起る、即ち先の義」であり、「物を噛み切る先の意」の〈齒〉も、「鋭き先あるに因りて名づく」〈刃〉も全て同根と説明している。「離す」意を持つ〈剥ぐ〉は、②の「ハナ(撥)を基とする諸語」であるとしている。このハナについては、ハヌル(撥)から生じた語幹であり、語として独立したハナ(端)は、「物又処の先の義にしてハ又ハシと相通ふ」という。そして、ハナが「ハナルル、ハナスの語幹と為りたるより、語根のハ(端)は其義を推し弘め」てハグルやハグが生じたと説く。いきなりここで「語根のハ(端)」と出てくるのが少しわかり

2) 書名は『国語の語根と其の分類』が原表記。

にくいのだが、要するにハナは名詞のハ・ハシや動詞のハナルル・ハナスに通じる語で、ハグはそのハナに由来するということである。

一方、〈接ぐ〉は③の「ハ（間）を基とする諸語」で、「間を着け合はす」ことという。そしてそのハ（間）については、「ハは、距離の意を生じて、間の義と為る」と説明している。端と端のあいだにあるのが〈間〉であり、その〈間〉を埋める行為が〈接ぐ〉ということである。

以上のことをまとめると、パチパチと撥ねる情態から、弾く様子や弾いた結果を表すハナルル、ハナツ、ハナスなどの動詞、および、それらの動きによって生じるハ（端・間）という名詞が生まれた、となる。この説にしたがえば、〈剥ぐ〉はハ（端）を生じさせる動作であり、〈接ぐ〉は生じたハ（端／間）を繕う動作であるといえるだろう。

3.2 ハグ・ハに関するその他の説

『大言海』には、〈剥ぐ〉は「端（ハ）の活用」、〈接ぐ〉は「間（ハ）の活用」とある。また、『日本古語大辞典』には〈ハギ（剥）〉は、「ハ（刃）」と「キ（活用語尾）」とあり、「キは行為を意味する活用語尾であるから、刃物を以て工作することをハギと称へたのであらう。木竹を削つて箭を作ることをヤハギといひ、木の皮を剥ぐにも刃物を用ひるのでハグ（剥）と称へた。後者から広く剥脱の意に適用せられるやうになつたのである。」と説明が加えられている。はじめに道具である刃ありきで、刃を使うことに由来する語というわけである。〈接ぐ〉に関しては、記述はない。

どちらの説にせよ、ハグは、ハに、活用語尾のグが付いたという見方である。そして、このハについてさらに見てみると、『古典基礎語辞典』には、刃は、「ハ（端、中央から外れた位置の意）と語源が同じか」との記述が見られる。

また、『字訓』には、「羽・葉・刃・末は、国語ではみな『は』である。羽・葉・齒は対生するものであり、また羽^{はぐき}茎、枝^{えだ}葉、齒^{はぐき}齧のように、その部分の『はし』にあるものである。刃・末は劍や樹木の末端を示す語で、これらはみな同系の語とみてよい」との記述がある（強調引用者）。そして、〈端（ハ）〉と同根の〈端（ハシ）〉は、〈間（はし）〉と同系の語で、「その両端」の意であり、その両端に架け渡すものが「橋」とされている。

中西進も『ひらがなで読めばわかる日本語』の中で、ハは「歯でも葉でも端でもある」と述べ、さらにハシには本来、「間」の意味があり、「橋」「端」「間」はもとが同じであるから、どのハシだろうかと意味を限定して理解しようとするれば、日本語が痩せてしまうと警鐘を鳴らしている。

これらのことをまとめると、〈剥ぐ〉のハも〈接ぐ〉のハも、その核となる概念に〈端・末端〉なるものが関わっていると考えられる。〈剥ぐ〉は、道具の先端にある〈刃〉を振るうからハグなのか、単に対象の端っこ部分に作用を及ぼすからハグなのかはわからない。が、道具の先の薄い部分が、物の表面を薄く削るのに適しているのは形状的に必然であり、この

両者のどちらが前に生まれたハであるかを考えても不毛であろう。他方、〈接ぐ〉は、平たくいえば薄い物の端っこ同士に橋を架け渡す行為である。〈間〉は、現在、ハヤハシと読むことはほとんどないが、『大漢語林』は古訓としてハシタを掲載している。天智天皇の同母妹の間人皇女は「はしひとのひめみこ」である。また、ハザマは、常用漢字表外の読みではあるが、現在でもよく使われる。このハザマのハは、〈端〉に通じるのではないかと考えられる。

4. 考察

〈剥ぐ〉も〈接ぐ〉も、何らかの形で〈端・末端〉に関わる動詞であるといえるだろう。本レポートでは追えなかったが、〈剥ぐ〉の語源説として『日本語源大辞典』に挙げられている(3)の「ハナシキ〈離来〉の義」も(4)の「ヘク〈隔転〉の義」も、〈離〉〈隔〉という字から見て、〈端・末端〉に無関係な語ではないと思われる。

端の同根とされる、刃・葉・歯・羽はどれも薄い物質であるという共通性をもつ。端っこにある薄い物を、もしくは端っこにある薄い物で、分離させる行為が〈剥ぐ〉であり、薄い物と薄い物との端をくっつけ、そのあいだを埋めて継ぐ行為が〈接ぐ〉である、といえるのではないだろうか。つまり、〈端・末端〉部分に手を加え、対象に変化をもたらす動作が大和言葉のハグであり、「剥」や「接」の漢字が入ってきてからは字義を重視して分離型のハグを〈剥ぐ〉、接着型のハグを〈接ぐ〉と表すようになった、と考えれば一応の説明はつく。

さらに推測を進めるなら、〈剥ぐ〉と〈接ぐ〉とを書き分けるようになると、二つは概念的に別物だという意識が働き、別物の語を同じ音で表すことが避けられるようになったと考えられる。その結果、〈接ぐ〉の方が語として衰弱していったのではないだろうか。〈接ぐ〉が単独語として用いられにくくなっていることと、〈間〉にハの訓が用いられなくなったこととは、無関係でないかもしれない。〈剥ぐ〉は〈剥離〉のハクという音の加勢も得て、ハグを表す語として優勢になり、劣勢になった〈接ぐ〉はツグ(継・次・接)という語に意味を委ねるようになった、とも思うが、これについてはあくまで臆測である。

5. おわりに

〈剥ぐ〉と〈接ぐ〉のもとを知りたいと思い、その語源説にあたってみたが、文献を調べる中で、語源探究の危うさを指摘する記述も多く目にした。いくつか紹介したい。

日本語は一般的に言って、いわゆる「語源」が考えにくい言語である。それは同系統の言語が特定されていないことによる。原理的に考えれば、言語の成り立ちの初めには単音節語があって、単音節語が複合して二音節語をうみだし、さらに三音節語、四音節語がうみだされるというのが「筋道」である。したがって、四音節語であっても、五音節語であっても、それが単音節語の複合したかたちに分解できるというのが「語

源」がわかっているということである。しかし日本語の場合はまったくといってよいほど、そのような状況ではない。

(今野真二『日本語の考古学』)

(語源は) 専門の研究者だけでなく専門知識を持たない人間にとっても興味やロマンをかきた立てる対象になる。(中略) ただし、前述の通りさかのぼれるのは日本語では一三〇〇年前までで、これは何万年から何十万と推定されている日本人の歴史から見れば、ほんの最近の短い期間でしかない。限界のある語源に過剰な思い入れをして、これが日本語の語源(ルーツ)であるとか、日本人の根元的な世界観であるなどと決めつけてしまうのは慎むべきことである。

(大倉浩「語源」『岩波日本語使い方考え方辞典』)

(語源を説明することは) 一見不可能な能記と所記との関係を、合理化しようとする試みであると言えるだろう。注意すべきは、その合理化が、語原探求者自身の立場に即した合理化になり勝ちなことである。

(阪倉篤義『日本語の語源』)

都合よく、二つのものを“力わざ”で結びつけると牽強附会の誹りを受ける。上記の言には、耳が痛いどころか冷や汗が出る。戒めとして心に深く刻みたい。しかし、逆にいえば、確たる証拠に出会えるわけでもないのに、語の由来に思いをはせる素人が後を絶たないわけである。つまりそれだけ心惹かれることなのである。一つの言葉がまさに〈橋〉となり、昔の人々と私たちとを結んでいる。今後、私は語頭にハの付く和語に出くわすたびに、〈端〉との関連を考えたり、もとはパラパラだろうかパンパンだろうか、などと想像を巡らせてたりすることと思う。

日本語は正書法がなく、多様な表記が可能な言語である。和語であれば特に表記に揺れが生じる。漢字の表意性を活かして微妙なニュアンスを伝えたいのか、大和言葉としての意味や響きに重きをおいて伝えたいのか、それによって選ぶ表記は違ってくる。読みやすさの観点から、ひらがなと漢字のバランスを考えて選ぶということもあるだろう。いずれの場合でも、漢字から大和言葉を見たり、大和言葉から漢字を見たりすることは大切なことだと思う。言葉を多角的、多面的に捉えて、その豊かな使い手になるよう努めたい。

〈参考文献〉

- 大倉浩「語源」、北原保雄 監修『岩波 日本語使い方考え方辞典』岩波書店、2003年。
大島正健『国語の語根とその分類』第一書房、1931年。
大槻文彦『大言海』新編版 富山房、1982年。
大野晋 編『古典基礎語辞典』五版 角川学芸出版、2012年。
鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、1992年。
北原保雄 編『明鏡国語辞典』大修館書店、2003年。
今野真二『日本語の考古学』岩波書店、2014年。
阪倉篤義『増補 日本語の語源』平凡社、2011年。
笹原宏之『訓読みのはなし』光文社、2008年。
白川静『新訂 字訓』普及版 平凡社、2007年。
中西進『ひらがなでよめばわかる日本語』新潮社、2016年。
前田富祺 監修『日本語源大辞典』小学館、2005年。
松岡静雄『日本古語大辞典』刀江書院、1929年。

開講場所：武庫川女子大学言語文化研究所 研究所棟 I-609

開講日時：

第1回 2016年5月28日(土)
10時30分～12時30分



第2回 2016年6月25日(土)
10時30分～12時30分



第3回 2016年9月17日(土)
10時30分～12時30分



第4回 2016年11月26日(土)
10時30分～12時30分



第5回 2017年1月28日(土)
10時30分～12時30分



企画・開催 岸本千秋（本研究所助手）
佐竹秀雄（本研究所研究員）
レポート指導 佐竹秀雄 岸本千秋
開催補助 森継真由（本学卒業生）

オトナのための日本語塾
レポート集 2016

刊行 2017年3月3日
編集 佐竹秀雄 岸本千秋
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
電話 0798(45)3534
FAX 0798(45)3574
Mail ilc@mukogawa-u.ac.jp
URL <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC/>
発行 武庫川女子大学
印刷 大和出版印刷株式会社
